松濤だより別冊
第十七号

東京佐賀県人会発行の「東京と佐賀」（年４回発行）のヤングやんぐコーナーに掲載された学生の記事を紹介します。

令和四年錦秋号
「はじめの一歩」

松濤学舎
出島　靖識

筆者のプロフィール
出身地　唐津市
出身校　福岡舞鶴高等学校
大　学　成蹊大学
法学部法律学科４年

私が上京して、３年半が過ぎようとしている。

私が初めて東京に来たのは高校三年生の８月、まだ東京に染まっていない佐賀県民だった。東京に来て誰もが一番はじめにやってしまうのは、高い高層ビルを見上げることではないだろうか。また、〇Ｉ〇Ｉ（マルイ）のことをオイオイと呼んでしまうことかもしれない。冗談はさておき、私は東京と佐賀の両方で経験したことを通して私よりも年下の人に伝えたいことがある。それは一度佐賀を離れてみて欲しいということだ。もちろん佐賀を離れると親元を離れることになる。そうすると、これまでやってもらっていたことを自分一人でやらなければならない。これがいかに面倒くさくて大変なことだったかが身にしみてわかる。自分の居場所が用意されていて、居心地がよくて、自分のことを理解してくれる友達や親の元を離れるのが怖い気持ちもわかる。しかし、少しでも自分を変えたい、何でもいいから挑戦してみたい。そういう気持ちがあれば東京という場所と参加、活動していくコミュニティが、自分の考え方、価値観、性格、学ぶ姿勢全てを変えてしまうのかもしれない。私は東京がそういう場所だということを約四年間生活してみて分かった。元々、私自身初対面の人に対して自分から話しかけることがとても苦手だった。東京に来て友達ができるだろうかという不安があった反面、東京での生活でそれが払拭できることに期待をしていた。私は現在、佐賀育英会松濤学舎に在籍している。そこでの最初の試練が共同生活を送る中でのルール指導だった。指導は挨拶、上下関係、メンタルまで鍛えられた。中でも私が一番苦手だったことは、後輩から先輩方に話しかけてコミュニケーションをはかるというルールだが、そこで鍛えられたことで、前よりも人見知りをしなくなった。また松濤学舎で得られたことがたくさんある中でも、一番大切なことは素直さだと感じた。言われたことをまず受け入れてみる。この気持ちがとても大切で人間関係を築く上で一番必要な要素だと考える。最後に私は東京に来て、多くの人と出会い、話しをする中で、様々な考えや価値観、そしてこれまで知らなかった違った世界を見聞し、視野を広げることができた。また、東京での生活は、これまで漠然としていた自身の思い・信念をしっかり認識させてくれた。上京して本当に良かった。

何でもいいから挑戦してみたい、自分を変えたいと考えている人に東京はうってつけの場所かもしれない。

令和五年新年号

「二度目の東京生活」

松濤学舎

吉松　宏祐

筆者のプロフィール
出身地　佐賀市
出身校　龍谷高等学校
大　学　早稲田大学政治経済学部
　　政治学科４年

私は、２０１１年から３年間父親の仕事の都合で東京に住んでいた。そして、２０１９年に大学生活のために上京して、２度目の東京生活を送ることとなった。この２回の東京生活には、「意思」と「意志」の大きな違いがある。

１度目は家族揃って東京に住むことが当然の「意思」であった。家族が揃って生活する中で、それなりに自由気ままに過ごしていたが、守るべき家族内のルールもあった。小学校高学年を東京で過ごしたのだが、良い事や悪い事など様々な経験は、総合的にみて良いものであったといえる。

２度目の東京生活は自分の「意志」によるものが大きい。まず、親元を離れ上京して大学生活を送る事を決めた。大学で何を学ぶのか？どんなサークル活動をするか？アルバイトはどうすべきか？今日は何を食べようか？どこへ旅行しようか？など種々の事を自分の「意志」で決めて行動しなくてはならない。１８年間両親の庇護下に居た時とは全く異なる生活で、多くの衝撃を受けた。私は中高ともに吹奏楽部に所属していたのだが、部費など両親に払ってもらっていた。大学でも、吹奏楽サークルに所属していた。サークル費や演奏会費、合宿の費用など、吹奏楽はお金がかかるものだと思ってはいたが、それを全て自分が払う必要が出てきて初めて大変さを実感した。今まで不自由なく部活に専念させてもらえていたことに感謝をしている。

私が２度目の東京生活を経て、強くした思いは「感謝」である。それは、これまで不自由なく生活をさせてくれている両親や、帰省するたびに声をかけて誘ってくれる友人、東京で共に寮生活をしている松濤学舎の友人など多くの人の支えがあって、今の自分がある。

特に私が感謝したいのが、佐賀にいる友人で、中高時代からずっと支えてもらっている。大学生となった今も、何かあれば頼ることができる居場所になってくれている。その居場所があるおかげで、辛いことがあっても頑張ることができたのだと思う。

残り時間が少なくなってきた２度目の東京生活だが、１度目のように良いものであったと思えないまま終わってしまうかもしれない。自分の「意志」で始めた東京での生活が良いものであったと思うためにも、「感謝」の心を忘れず、悔いの残らないように過ごしていきたい。